

アリストテレスにおける『ケノン』の構造

副島, 民雄
お茶の水女子大学文教育学部 : 教授

<https://doi.org/10.15017/27403>

出版情報 : 哲学論文集. 2, pp.1-16, 1966-10-08. 九州大学哲学会
バージョン :
権利関係 :



アリストテレスにおける『ケノン』の構造

副 島 民 雄

1

古代ギリシア人は空間的なものをあらわす言葉としてケノン (*τὸ κενόν* 空虚)、トポス (*ὁ τόπος* 個処)、コーラ (*ἡ κόρα* 場所) を用いている。たとえば Diels, *Doxographi Graeci* (S.317) に、ゼノンとその一派はケノンを *ἐρημία σώματος* (物体のなごこ) 、トポスを *τὸ ἐτεχόμενον ὑπὸ σώματος* (物体によって占められているもの)、コーラを *τὸ ἐκ μέρους ἐτεχόμενον* (部分的に占められているもの) とした、と述べられている。がもとこの三語は混用されているようである。がこれらを特別な意味に用いたのはプラトンとアリストテレスである。アリストテレスはその『ピュシカ』においてトポス論 (VI,1-5)⁽¹⁾ とケノン論 (VI,6-9)⁽²⁾ を展開している。ケノン論では彼は自分に至るまでのケノン論を紹介し、ついでその批評に入り、結局ケノンが存在しえないことを述べている。そこで彼についてみると、彼はケノンが存在しないと主張する人としてメリッソス、アナクサゴラスをあげているが、われわれはエレアのゼノンもその一人に加えることができる。

ゼノンはトポスの存在を否定して、もしトポスがあるなら、それは何ものかのうちにあることになる、というのはあるものはすべて何ものかのうちにあるのだからである。そして何ものかのうちにあるものはまたトポスのうちにある、したがってトポスもトポスのうちにあることになる、そしてそれは無限に溯及することになる、したがって結局

トポスはあらないというのである。これはケノン論ではないが、ケノンとトポスは密接に関係させられていて、しばしば同義に用いられているので、ゼノンのトポス論は、彼の時代とエレア主義とを考えあわせる限り、これをケノンにあてはめるにしても大きな誤を犯すことにはならないだろう。⁽³⁾

メリッソスによれば、ケノンは何でもないものであるから、如何なるケノンもあらないのである。ケノンの存在の否定は運動の存在の否定である。すなわち彼によれば存在者は動かない、というのはそれは何処にも動いてゆくところがないからである。ところが存在者は充ちたものである。もしケノンがあるならば存在者はケノンに退いてゆくことができるだろう、がケノンはあらないのだから退いて行けるところを何処にも持たないのである。だから運動することができないのである。さらに存在者は密でも粗でもないのであって、もし密や粗の存在を許すとすれば、粗なるものは密なるものと同様に充実してあることはできないのであるから、粗なるものは密なるものより空虚なものとして出来ているのである。そして充実したものと充実していないものとは何かを含むとか受入れるとかをするかしないかにおいて異っている。充実したものはそのなかにケノンをもたない、だから何かを受入れることをしない、したがってそれは動かないということになる。さらにケノンがあらないとすれば、物体を離しておくものが何もないのであるから、存在者は一つであって多ではありえないということになる。そして最後に存在者を、パルメニデスのように、周囲を限られた球であるとするならば、その限りの外側に何ものかがあらねばならぬということになり、その或るものはケノンに外ならないことになるだろう、それでは存在者は有限なものとなるであろう。以上のごとくにしてメリッソスは、ケノンの存在を否定することによって、存在者の一なることとその不動性と無限性とを確保しようとしたのである。⁽⁴⁾

アナクサゴラスもケノンの存在を否定するのであるが、彼の主張は普通にケノンといわれているものは真のケノンではなくして、実はそのなかに空気が充たされているのである。その証拠には、酒袋をふくらませることができる

いうこと、すなわちそれには空気の抵抗があることである。またクレプシドラという水あげ器はサイフォンの原理を利用して、その中に空気を取入れることによって水を追出すことができるのである。⁽⁵⁾

2

次にケノンの存在を許す言説として原子論者とピュタゴラスがあげられる。アリストテレスによれば原子論者は(1)もしケノンがあらぬならば運動は起らない、充てるものはそれ以上何も容れない。もし容れるとすれば同じ場所に二つのものがあることになる。(2)ものが狭められ圧縮されうるのは、そのうちにケノンが存在するからである。(3)灰に水をかける場合、灰がもっているケノンと同量の水を吸収すると主張する。⁽⁶⁾

原子論者は宇宙構成の要素として充てるもの(*τὸ πλήρες*)と空なるもの(*τὸ κενόν*)をあげるのであるが、前者はアトマ(*ἄτομα*)としてあるもの(*τὸ ἰόν*)であり、後者はあらぬもの(*τὸ ἄν ἰόν*)である。前者は充ちて堅いもの、量において無限なものであり、後者はあらぬものではあるが大きさにおいて無限なものである。あるものはいずれもあらぬものより以上にあることはない、物体は空なるものより以上にあるものではないからである。アトマはこの空なるもののなかで動くのである。また空なるものがなければ運動はありえない。空なるものはあらぬものではないが、また或る意味ではあるものであるから、アトマはそれらのものうちを動くのである。空なるものはあるものを互いに離し、形や大きさや位置や排列において異らせるものである。かくて原子論者は運動の条件としてケノンの存在と物体から離れたケノンの存在とを確立しようとしたのである。⁽⁷⁾

ピュタゴラスの徒もまたケノンの存在を主張する。すなわちケノンは存在する、そして息とケノンが無限なるものから宇宙自身のなかには入ってくる、それはいわば吸込むようにである。そしてケノンは連続しているものを離し区切るものとして、ものの本性(*physis*)を区切る。そしてこの事はまず数の場合におこる、というのはケノンはそれ

らのピュシスを区きるからである。

これによると無限なるもののうちに息と空虚とがともにある、すなわち無限なるもののうちには実と虚が存在する、それにはあらゆるものが可能的な状態において存在するといつてよからう。まずプネウマが凝ってはじめは何か一なるものが生ずる、それをケノンに限ることによって独在的なものとなる、そしてそれはもっとも身近かな無限なるものを引入れて成長する。その周辺に他の限定されたものが生じ、それが一定の比の関係において分散する、しかもそれがすべて一つの調和を保つようにされる、そしてケノンがそれらを分ち保つ働をするのである。はじめに生じた一なるものは周辺のことを吸込むことによって成長して二なるものにひろがり三なるものにひろがる。二なるものがひろがり (*διεσπάρων*) として最初のものである。⁽⁸⁾線がそれである。

原子論者のケノンとピュタゴラスの徒のケノンとの間には大分のへだたりがあることは自明である。ピュタゴラスのケノンはプネウマと共在するもので、いわばアナクサゴラスの空気をもったケノンのごときものである。しかしピュタゴラスのケノンはいわゆる質料 (*ἕξις*) とケノンとが分離しようとする段階のものであるということが出来る。これが原子論者においてははっきりと分離的なものとなる。アリストテレスが存在否定論の目標としたのはまさに原子論者の物体から全く分離したもの (*κεχωρισμένον*) としてのケノンであった。

ピュタゴラスの徒の場合、問題になるのは、無限なるものを限る限りとケノンとの関係に関することであろう。上にあげられた断片によれば、限るものはケノンであつて、無限なるものはケノンという限り (*πέρας*) によって限られることによつて宇宙は形成されるのである。この両者はともに宇宙の形成要素として同質のものである。⁽⁹⁾

3

アリストテレスはケノンの存在を否定するにあたり、まずケノンを明確に規定しようとした。それによれば

(1) ケノンとはそのうちに何もない場所 (*τόπος ἐν ᾧ μηδὲν ἔστι*) のことである。(2) これをいまだ少し細かにいえば、その場所のなかに何らの物体もない (*ἐν ᾧ τόπος μηδὲν ἔστι σώματος*) ことである。ところで物体はすべて可触的 (*ἄπτοῦ*) である。可触的なものは重さか軽さかをもつので、(3) ケノンとはそのなかに何ら重さも軽さもないもの (*ἐν ᾧ μηδὲν ἔστι βαρὺ ἢ κοῦφον*) であるといふことができる。

ところで点は、そのうちに何ら重いものも軽いものもないものであるけれども、それをケノンであるとする事はできない。というのはケノンはひろがりある場所でないからである。そこで(4) ケノンはそのなかに可触的な物体のひろがりある場所 (*τόπος εἶναι ἐν ᾧ σώματος ἔστι διάστημα ἄπτοῦ*) といふことができる。ひろがりはおきまである。したがって(5) それは可触的な知覚的物体に充たされていないもの (*τὸ μὴ πᾶν περ αἰσθητὸν σώματος κατὰ τὴν ἀφ᾽ ἧς*) であるといふことができる。

ところでもしそのなかに色や音をもっているひろがりはどうだろうか。それはケノンであろうか。もしこれをケノンであるといえればケノンは可知覚的なものを持ちうることになる。もしケノンでないといえれば可触的なもの (*σώμα ἄπτοῦ*) によって充たされていないのにケノンではないということになる。そこで仕方を改めて、ケノンはたとえ色や音のようなものを受けることができるにしても、そのようなものではないものであるといわねばならぬ。そこで(6) 一層具体的にいえばケノンはそのなかに何かこのもの (*τὸδε τι*) とか何か物理的な存在 (*οὐσία τις σωματικῇ*) がないものといふことができる。その意味はケノンが物体から分離したもの (*τὸ κενόν …… ὡς χωριστόν*) であるということである。⁽⁹⁾

ところでわれわれはこの場合彼のトポス論をあわせ見なければならぬ。彼は「われわれはトポスについて規定し、ケノンはもしそれが存在するならば、それは(7) 物体が除去された場所 (*τόπος εἶναι ἔστερημένον σώματος*) できればならず、そしてわれわれはトポスが如何にしてあり如何にしてあらぬかについて述べたのであるから、以上によ

ってケノンは分離的にも非分離的にも (οὐτε κελὼρισμένον οὐτε ἀχώριστον) あらぬことが明かである。」と言っている。ところで彼のトポス論によれば、トポスと物体は別ものではあるが、物体のないトポスは考えられないのである。この事はケノンについてもいえるのであって、ケノンが物体のない場所であるとすれば、物体のない場所は存在しえないのであるから、ケノンも当然存在しえないことになるのである。⁽¹⁾ アリストテレスのケノン論には常にそのトポス論が背後にあったことはいなめない。

4

彼のケノン否定論は物体相互の間の相互転換 (ἀντιμεταστάσις or ἀντιμετάστασις) が基礎になっている。すなわち彼によれば月下の世界を構成する要素として四元素が存在し、それらは上より下宇宙の中心に向って火、空気、水、土の順序で各々固有の場所を持っており、その場所に安んずるときは静止する、が月下の世界ではこれらが各々混在している、各要素はその固有の場所に帰るべき本性を持っているので、そこに帰るための運動をする、たとえば火と空気は上へ水と土は下へと相互に転換する。のみならずこれらの元素もそれ自身永遠ではなくして、相互に生成し合うものである。そしてこれらの運動は絶えることがない。このような根拠からして、運動のためにケノンがあらねばならぬとの主張は否定されるのである。すなわち(1)原子論者によれば、ケノンは物体の条件 (ἀπὸ τοῦ) であるが、ケノンは運動の条件にはならない。それは充てるものは質的に変りうるし、また運動そのものにはケノンは含まれないからである。というのは物体が動くときは、動いている物体から離れたあきま (διαστήματα) はなくとも、同時に互いに譲り合うことができるからである (ἀμὰ γὰρ ἐπὶ ἐκείναι ἀνέχεται ἀλλήλους)。このような相互の同時の入れかわりは水の渦巻のような連続した物体の回転の場合によくみられる現象である。このような相互転換にはケノンの存在を必要としないのである。⁽²⁾ またものが圧縮されるとき、その内部のケノンのなかに圧縮されるのではなく

て、そのなかに持っているものをしぼり出すことによって圧縮される。たとえば水が圧縮されると、そのなかの空気がしぼり出されることによって圧縮されるのである。⁽¹⁴⁾ (3)さらにものが増大される場合、何かがはいってゆくことによって増大するのみならず、質的変化によって *(kataiōsis)* も増大する、たとえば水から空気が生ずる場合のようなものである。⁽¹⁵⁾ このようにしてアリストテレスは物体相互の譲り合いと相互転換によって運動がおこることを論証しようとした。

5

アリストテレスは次に物体からはなれたケノンはあらなことを証明しようとする。すでに上で述べられたごとく彼はケノンからあらゆる規定的要素を取去ることによってケノンには何らの可能性 *(dynamis)* も認めることをしなかった。そこで彼は真空の存在を否定したといわれるが、彼におけるケノンはいわゆる真空以上に物体とは全く孤絶したものであって、何の条件も含まないものである。したがってケノンには何ら運動の原理がない。そこでそこにはピュシスの運動もピュシスの場所もない。運動の場がないから上下の別もない。当然運動の媒体がないから運動の持続も停止もない。これらの事を証明するために彼は次のような事象をあげる。(1)簡単な物体たる四つの要素は固有な特性を有するので、各々その本性にかなった移動 *(ekoponēsis)* を持っている。たとえば火は上へ土は下へといったような。しかしケノンにはそのような特定の方向への移動の条件 *(aitia)* がない。⁽¹⁶⁾ (2)ところでもしケノンが物体が取去られた場所であるならば、そしてそれがあるとして、そのなかにおかれた物体は何処に運ばれるだろうか。ケノンの全体のなかに運ばれるということはない。この同じことは、トポスが分離している何かであると思っている人々に対してもあてはまるのである。全体のなかにでないとすればその部分に運ばれることになるのであるが、その部分は他のいずれの部分とも全く等質であるので物体は上にも下にも動きようがないし、また止るにしても止りようが

ないことになる。⁽¹⁷⁾ (3) また物体はそれが全体としてトポスカケノンのなかに置かれるとしても、その離されない部分はその全体のなかにあることになるのであって、トポスカケノンのなかにあることにはならない。たとえば眼のなかの瞳は眼のなかにあり、身体の中の手は身体の中にあることになる。⁽¹⁸⁾

(4) また分離したトポス (τόπος κεχωρισμένον) がないとすれば、ケノンもまたない。ところが分離したトポスの存在が困難であることはすでに論ぜられた。もしこれを認めるならば、分離したケノンの存在も困難であると結論することができる。⁽¹⁹⁾

6

ところでケノンが存在するとして、そのなかに物体を置く場合 (1) 物体は動くことができない。というのはものが定った一方へと動きうる場所がないからである。それはケノンがケノンであるかぎり差別性 (διαφορὰ) を持たないからである。⁽²⁰⁾ 次に (2) すべての運動は強制的 (βίαια) であるか本性に従うもの (κατὰ φύσιν) であるかのいずれかである。そしてもし強制的なもの (βίαιος) があるとすれば、当然本性に従う運動がなければならぬ。というのは強制的な運動は本性に反するもの (παρὰ φύσιν) であり、本性に反する運動は本性に従う運動より後である。そこでもし本性的 (自然的) 物体の各々にとって本性に従う運動がないならば、他の運動の何ものもないことになる。けれどもケノンや無限の下においては何らの差別性がないならば、そこでは本性に従う自然的運動はありえないのである。というのはもしそれが無限であるならば、それには上も下も中もない。それがケノンであるかぎり上も下も何らのかわりもない、というのは何もないところには差別がないからである。それはケノンには何もないからである。ケノンは非存在 (μὴ ὂν τι) であり存在の排除 (στέρησις) である。が自然的運動は差別的であり、したがって自然的物体は差別的である。だから自然的移動を認めるとすれば、ケノンは存在しないことになる。換言すれば物体の運

動を認めることはケノンの存在を許すことと矛盾するのである。⁽²¹⁾ (3)さらに投げられたもの ($\tau\delta$ $\pi\alpha\rho\theta\iota\mu\epsilon\nu\alpha$) は、それを押すものが触れなくとも ($\tau\omicron\upsilon$ $\sigma\alpha\rho\alpha\rho\omicron\varsigma$ $\omicron\upsilon\chi$ $\delta\iota\pi\tau\omicron\upsilon\mu\epsilon\nu\omicron\varsigma$) 運動する、それは相互転換 ($\delta\iota\upsilon\tau\tau\epsilon$ $\pi\iota\sigma\tau\alpha\iota\varsigma$) によってか或いは押されていた空気が、媒体となつて、それでもって固有の場所に動かされるところのその押されるものの移動運動よりより速い運動で押すことによつて、運動するのである。相互転換は物体と物体が接触するとき起るのであつて、物体相互の間にケノンはない。後の場合、押されるものの自然的運動、すなわちその固有の場所に落ちつこうとする運動、よりより早く媒体が働くことによつて運動は次の物体に伝わる。ところがケノンにおいては転換が起るべき物体がないので相互転換は起らないし、また媒体も存在しないので運動が他に伝わることもなければ、また抵抗を受けることもないのである。⁽²²⁾ (4)さらにひとはケノンにおいては一旦動かされたものが何処で何故に止まらねばならないかということを行うことができないだらう。ケノンには運動をさまたげる如何なる抵抗もないので、運動は無限に続くとも考えられる。⁽²³⁾ (5)さらに物体は、もしケノンがあるとすれば、ケノンのなかに動くと思われる、というのはケノンは退くことができるからである。ところがケノンは無差別の場所であるから、この退くということもケノンのすべての処において等しいので、ものはケノンのどの方向にも運ばれうるのである。⁽²⁴⁾ (6)さらにきまつた同じ重さの物体は二つの理由で他よりより速く動く、それは物体がそれにおいて動くそのところに差別があるからである。たとえば媒体として水と土、水と空気の間には比的な違いがあるからであり、また動くものは、他の点では同じであつても、重さや軽さが過剰であることによつてその運動力において他のものから違つてゐるからである。⁽²⁵⁾ (7)ところで差別を結果するのは媒体 ($\tau\omicron\upsilon$ $\delta\epsilon\iota\omicron\varsigma$) である、それはものが反対に動いてゐる場合に最も多く妨害する、それが止つていてもそれに次ぐ効果を与える。そして特に媒体は容易に分割されないものであつて、何らかより密なものである。⁽²⁶⁾

アリストテレスは次の例で説明する――

A が B を通つて Γ 時に動くとする、さらに A が Δ (B より稀薄な) を通つて E 時動くとする。この運動は当然 B や

Δ のごとき妨害する物体の密度に比例することになる。いま **B** を水、 Δ を空気とする、空気は水より稀薄でより非物体的である。**A** は **B** を通るより Δ を通る方がより速く動く。その比は空気が水に対する速さと同じ比 ($\frac{v_{\text{air}}}{v_{\text{water}}}$) をもつ。そこでもし空気が水より二倍だけの稀薄さをもつとすれば、物体は Δ を通る時間の二倍の時間で **B** を通る。そこで Γ は **E** の二倍ということになる。かくて媒体は、それが一層物体的でより少く妨害的でより多く可分割であるのに応じて、運動はより速くなり、ついには無限大になる。⁽²⁷⁾

ところがケノン⁽²⁸⁾は、それが物体によって超過されるべき何らの比も持たない。ケノンは零であるから、ケノンと物体は零と数との関係のようにその間には何らの比も成立しないのと同様である。つまりケノンは充実 (plenus) に対して何らの比も持ちえないのである。⁽²⁸⁾

さらに **Z** をケノンとし、これがさきの **B**、 Δ と量において等しいとする、**A** が **Z** を通る時間を **H** とすれば、それは **E** より少ない時間である。いま **Z** を物体とみて、それが **E** 対 **H** に等しい比で Δ に対してより稀薄であるとすれば、**A** は物体 **Z** を **H** 時間で通ることになる。すると **A** は **Z** が充実していても空虚であっても同じ時間で通ることになる。しかしこの事は不可能である。というのは二つの運動の間には比があり、また運動には時間があり二つの時間の間には双方が有限であるかぎり、比がある、けれどもケノンと充実との間には比はないのである。⁽²⁹⁾

上にのべた物体の運動のちがいは要するに媒体の相異による。物体が他の点では等しくて、重さか軽さかのいずれかにおいてより大なる転機 (perichoresis) を持つ物体は同じ場所 (topos) をより早く動く。そしてその大きさがもしケノンのなかを動くとなれば、ケノンのなかには運動を差別すべき物体がなにもないから、したがって運動をより早くしたりより遅くしたりする媒体がないから、すべては同じ速度を持つことになる。しかしこのようなことはありえないので、ケノンはあらぬといわなければならない。⁽³⁰⁾

以上のケノン否定論の派生理論としてさらに次の二つが附加される。すなわち(1)もしひとが立方体を水中におくとすれば、立方体と等量の水がおき換わる。この事は空氣のなかでも同様である、がそれはわれわれに知覚されないだけのことである。如何なる物体もそれが圧縮されないかぎり、それがおき換わるべき方向へのおき換り (*μεταβολή*) が起る。たとえば土のようにその移動が下へであるならば下へ、もし火であるならば上へ、或いは両方へというふうに。ところがケノンにはこの事は起らない。というのはそれは物体ではないからである。立方体がケノンのなかにおかれた場合、それがケノンのなかで占めたのと等しいひろがり (*διεσπύμα*) が立方体を通して浸透することになる、丁度水や空氣が木の立方体によっておき換えられることをしないで、それを通して行くかのごとくに。ケノンではおき換りが起らないからである。⁽³¹⁾

ところで立方体はケノンが占めていたと等しい大きさを持っている。しかしそれは容積 (*ἔγκοον*) として、たとえばそれがすべての属性から離されていなくとも、さきのひろがりとは異なるものと考えられる。そこでそれは立方体から引離されてもケノンの同じ広さをもち、それ自らと等しい場所かケノンの部分かにある。すると立方体の物体 (*σώμα*) とそれに等しいケノンや場所とは如何に異なるのであろうか。もしこのようなものが二つありうるとすれば、何故に如何なるものもが同時にありえないだろうか。すなわちこの二つの間には差異はないのであって、もしあるとすれば同じ場所を二つのものもが同時に占めることになるのである。⁽³²⁾

立方体は、たとえそれがおき換えられても、同じ容積を持つのである。この事は他のすべての物体においても同様である。もしそれが場所によって異ならないとすれば、われわれは何故に物体のために、その各々の容積以外に、場所を与えねばならないのだろうか、容積がその属性から自由であるとして。それと等しいひろがりがあるにつけ加えられようとも、何もそれに加えるところはないのである。以上の考察によって分離させられたケノン (*κεχωρισμένον*)⁽³³⁾ はあらぬことが明かである。

さらにいまい、稀薄と緻密 (*rarion kai tukhion*) の存在によってケノンの存在を示そうとする論がある。すなわちもし稀薄や緻密が存在しないならば縮小や圧縮は起らない、もしそれらが起らないとすれば、何らの運動も起らないことになる。すると宇宙はふくれ、空気や水は常に同じ量のなかに変ることになる。そこで圧縮や膨脹が起るためにはケノンがなければならないというのである。⁽³⁴⁾

(1)ところで稀薄を彼等は多くのケノンが離れ離れに持つものであると言うとして、トポスが自らのひろがりをもって存在しえないと同様、ケノンも存在しないとするならば、この意味で稀薄も存在しえない。もし分離的でなくケノンが存在して、稀薄のなかにあるとするならば、まず第一にケノンはすべての運動の原因となることはなくて、(i)ただ上への運動の原因となることになる、なぜなら稀薄は軽いからである。(ii)次にケノンはものを上に運ぶという点で運動の原因であると思われるかもしれない、がケノンは如何にして場所的運動か場所かを持ちうるだろうか。というのはこのようにしてケノンがそのなかに動くそれはケノンのケノンであるということになるからである。⁽³⁵⁾(iii)重いものの場合、その下への運動は如何に説明されるだろうか。それは説明を不可能にするのである。(iv)物体が稀薄で一層ケノンのであるならば、それは益々早く上へと動くだろう、もしそれが完全にケノンであつたならば、それは最も早い速度で上へと動くだろう。が実際はこの事は不可能である。それは全く動くことは不可能である。ケノンのなかではすべての物体が動かないと同じ理由が、ケノンが動かないことを示す、というのはその速さは想像することができないからである。それは運動の原理を破ることになる。⁽³⁶⁾

以上に考察されてきたところによって、ケノンは絶対的に分離しても、また稀薄なものの中にも可能的に (*dynaton*) も存在しないことが明かである、ケノンを移動の条件 (*aition*) とよぶのでなければ。もしもケノンを移動の条件とするならば、重いものや軽いものの質料 (*stul*) は、それが質料であるかぎり、ケノンであるということになる。というのはそれが緻密なものが下に、稀薄なものが上に移動する運動の産出者 (*protutkch*) であり、堅さや軟

かさを受容れたり受容れなかったりすることをさせるものであり、また質的变化 (ἐτεροποιότης) をさせるものであるということになるであろうからである。⁽³⁷⁾

8

ところですでに明かであるように原子論者はケノンの存在を許し、物体はケノンのなかで、アリストテレスのいわゆる自然的運動を行うことを認めている。すなわち原子論者によれば、あらゆる種類の形をした物体は、無限から切り離されることによって (κατὰ ἀποτομήν ἐκ τῆς ἀπειρίας) 大なるケノンへ (εἰς μέγα κενόν) 運ばれる。そしてこれらのものが集って一つの渦巻を作る。その渦巻のなかで物体は互いに衝突しあらゆる仕方でも転回しつつ、似たものは似たものの方へと互いに離れてゆく。がそれらが量多くなってもはや平衡を保って転回することができなくなると、それらのうちの軽いものはあたかもふり分けられるかのように外のケノンへと出てゆく、が残りは一緒に止まって互いにかみ合いながらともにかけ下って、最初の球の組織を作るのである。⁽³⁸⁾ またアトムに重いアトム、軽いアトムがあるのは、より少くケノンを持っているのとより多くケノンを持っているとの違いによる。鉄と鉛とで重さが違うのも同じ理由による。⁽³⁹⁾ このように、存在するものどもは常にケノンのなかを運動する。⁽⁴⁰⁾ すなわち原子論者のケノンは物体とともにあるケノンとして、そのなかで自然的運動が行われる場処である。

ところがアリストテレスにとっては、この月下の世界は存在が充満した世界であるので、物体のないあきまであるケノンは受容れられないものであった。だからもし物体のないあきまを考えるとすれば、それは隔絶されたケノンとして全く抽象化された、あらゆる可能性を剥奪された、したがって何らの運動の原理をもたないものとなったのである。

備考 アリストテレスの『ケノン』は次のように表示することができる。

I ケノン論の紹介

1 ケノン否定者たち.....1

2 ケノン肯定者たち.....2

II ケノン規定(1 2 3 4 5 6 7).....3

III ケノン否定論

1 否定論の基礎(相互転換) (1 2 3).....4

2 独在的ケノンの否定(1 2 3).....5

3 帰謬法による否定の論証(1 2 3 4 5 6).....6

4 系(1 2).....7

註

1 Arist. Phys. 41-5 (208a-213a).

2 ¹ibid. 46-9 (213a-215b).

3 ²ibid. 41 (209a23), 43 (210b22), *Simplic. Phys.* 562,3. cf. *Arist. Phys.* A3 (210b22).

4 *Arist. Phys.* 46 (213b12-14), D.K. 30B (*Simplic. Phys.* 111,18), *Arist. de gen. et corr.* A8 (321a14, 325a2-16), D.K. 30A8.

5 *Arist. Phys.* 213a22, D.K. 59A68.

6 *Arist. ibid.* 214b2-21.

7 D.K. 67A6 (*Arist. Met.* A4, 985b4), D.K. 67A7 (*Arist. de gen. et corr.* A8, 324b35, 325d2, 325b1), D.K. 67A14 (*Simplic. de caelo*, 242,18-21), D.K. 68A40 (*Hippol. Ref.* I 13), D.K. 68A135 (*Theophr. de sensu*, 61sqg), D.K. 67A16 (*Arist. de caelo* T2,300b8), D.K. 67A1 (*Diog. IX*31), *Diels*, D.G.S. 315,317, *Kirk & Raven, The Pre-socratic Philosophers*, 1962, p. 405-8.

- 8 Arist. Phys. 213b22-27, Meta. N3, 1091a13, Stobaeus, Anth. I 18 1C, Alexand. Met. 512.37 (Comment. Arist. Met. 211, 1036b8, 406), Simplic. Phys. 651, 26. cf. Arist. Met. M6, 1080b20 (D.K. 58B9), Speusippus ap. Theophrastus Arithmeticae p. 84, 10 de Fulco (D.K. 44A13), Arist. Met. N3, 1090b5.
- 9 D.K. 44B1, 2, 3, 6, D.K. 58B26, 30, K. & R. op. cit. p. 242, 無限なるものと限りとはペラトン『ジュネボス』において論ぜられているがピュタコラスのプラトンにおける発展については別の論文が要求されるであろう。
- 10 Arist. Phys. 213b30-214A17.
- 11 *ibid.* 214a17-21.
- 12 *ibid.* 192b20, de caelo, I 6-7, 304b-306b.
- 13 Arist. Phys. 214a22-32.
- 14 *ibid.* 214a32-214b1.
- 15 *ibid.* 214b1-3.
- 16 *ibid.* 214b12-17.
- 17 *ibid.* 214b17-23.
- 18 *ibid.* 214b24-28.
- 19 *ibid.* 214b28.
- 20 *ibid.* 214b28-215a1.
- 21 *ibid.* 215a1-14.
- 22 *ibid.* 215a14-19, Ross, Comment. p. 727 における解釈例—A ↓ B ↓ C ↓ D ↓ Y ↓ Z ↓ A ↓ B ∴ A が B を C の場所におす、B が C を D の場所におす—Y が Z を A の場所におす、A が B をおすときその間の媒体の空気を同時に、空気が自分自身動くことによって物体を動かしつつける、媒体は始動のものが動く間のみ動きつつけるが始動が止れば媒体も動きを止める。
cf. Phys. 266b27-267a12.
- 23 *ibid.* 215a19-22.
- 24 *ibid.* 215a22-24.
- 25 *ibid.* 215a24-29.

- 26 *ibid.* 215a29-31.
 27 *ibid.* 215a31-215b12.
 28 *ibid.* 215b12-22.
 29 *ibid.* 215b22-216a11.
 30 *ibid.* 216a11-26.
 31 *ibid.* 216a26-216b1.
 32 *ibid.* 216b1-12.
 33 *ibid.* 216b12-21.
 34 *ibid.* 216b22-30.
 35 *ibid.* 216b30-217a1.
 36 *ibid.* 217a1-10.
 37 *ibid.* 217a10-217b28.
 38 D.K. 67A1 (Diog. Laert. IX31), K. & R. op. cit. p. 411f.
 39 D.K. 18A 135 (Theophr. de sensu, 61 sq.), *ibid.* 62.
 40 これに対するアリストテレスの批判は *de caelo*, IV, 307b-313b においてみられる。

ここで彼は重さ軽さの原因について考察し、それはもとなる物体の差異によるものであるとする。またそれ自体において軽いもの重いものとへば空気や土においては、つねに上へと動く本性、つねに下へと動く本性がある。そこで空気は軽く土は重くある。したがって重い軽いはケノンに関係しないことになる。

(お茶の水女子大学文学部教授。昭和四十一年三月まで本学文学部教授・哲学)